令和六年二月
大学院文学研究科

宮澤　歩美　提出　学位申請論文

「幕末維新期における譜代藩江戸留守居役と江戸藩邸」学位審査報告書

國學院大學

宮澤　歩美　提出　学位申請論文（課程博士）

「幕末維新期における譜代藩江戸留守居役と江戸藩邸」学位審査要旨

論文の内容の要旨

本論文は、近世後期から維新期における譜代藩の江戸留守居役の役割とそのネットワークについて、特に大政奉還から戊辰戦争期の政治状況の変化に、譜代藩の江戸留守居役が如何に対応したのかを検討し、譜代藩の意志決定における江戸留守居役と江戸藩邸の役割を論じたものである。

江戸留守居役の研究は近世初期から後期にかけて厚い蓄積があるが、幕末維新期の江戸留守居役や江戸藩邸については、注目すべき研究は少ない。幕末に江戸藩邸の役割が縮小され、幕末の政局が京都中心となっていくなかで、江戸留守居役や江戸藩邸の役割はあまり研究上注目されていない。幕末維新期の江戸留守居役や江戸藩邸を政治過程に位置づけた研究は僅かである。本論文は、

以上の動向を批判的に捉え、新たな分野の開拓を試みている。

本論文は二部六章および序章・終章から構成される。第一部「幕末維新期における譜代藩江戸留守居役と江戸藩邸」は、第一章「近世後期における江戸留守居役の機能と役割」、第二章「維新期江戸における譜代藩の「大勢挽回」運動」、第三章「明治維新期の江戸留守居役と公用人」からなる。第二部「戊辰戦争をめぐる譜代藩江戸藩邸の動向」は、第四章「戊辰戦争期における佐倉藩の動向」、第五章「戊辰戦争における小田原藩江戸藩邸の動向」、第六章「戊辰戦争をめぐる田中藩江戸藩邸の動向」であり、戊辰戦争期における譜代藩の国元・江戸・京都における政治への対応を検討している。

序章は、幕末維新期における譜代藩と江戸留守居役に関する研究史を整理し、研究課題と本論文の構成を提示している。

第一部「幕末維新期における譜代藩の江戸留守居役と江戸藩邸」は、近世後期から明治維新期にかけて、譜代藩江戸留守居役の動向と江戸・東京の政治動向について論じている。幕末期京都に政局の中心が移ったといわれるが、幕府

は江戸にあり、ことに譜代藩にとっては重要な存在であって、維新期東京に政府の機関が成立すると、政府よりの布達や諸藩との連絡調整に東京の屋敷が大きな役割を果たすというのが本論文の主張である。

第一章「近世後期における江戸留守居役の機能と役割」は、文政・天保期の武蔵忍藩松平氏の江戸留守居役が、領内の訴訟や幕府の文政改革組合村の結成への対応に、幕府役人と交渉する姿を検討している。藩領の村や町の訴状を幕府勘定所に取次ぎ、罪人引き渡しなどの連絡・交渉に、江戸留守居役が果たした役割を解明している。忍藩松平氏は文政六年に伊勢桑名から転封したが、その直後の文政十年に幕府が関東において文政改革を断行し、幕領・藩領・旗本領など支配の区別に関わらず地域ごとに組合村を結成させたため、非領国的な関東の支配の特徴に不案内な忍藩松平氏はその対策に苦慮し、武蔵川越藩などとは異なった対応を見せた。本章は、幕府の政策に江戸留守居役が対応する様相を紹介している。また領内の中山道熊谷宿における飯盛女設置一件についても論じている。この一件に関わる研究は、交通史・女性史などから注目されて

いるが、本章では江戸留守居役と幕府側との交渉について、新史料を提示しながら分析している。

第二章「維新期江戸における譜代藩の「大勢挽回」運動」は、慶応三年の大政奉還から翌四年の戊辰戦争前半にかけて、帝鑑間詰・雁間詰の譜代大名の政治動向に江戸留守居役や江戸藩邸が如何なる役割を果たしたのかを考察している。大政奉還直後に帝鑑間詰・雁間詰の譜代大名が朝廷の諸大名上京命令を拒否し、「大勢挽回」を目指し連帯して上書を作成した。このとき帝鑑間詰諸大名の江戸留守居役により構成された留守居組合が、作成と提出に大きな役割を果たした。この行動について、鈴木壽子『幕末譜代藩の政治動向』が譜代藩の「政治的連帯」と大きな評価を与えている。これに対し、本章では鈴木の主張を批判し、下総佐倉藩堀田氏の江戸留守居役と江戸藩邸の動向を中心に検討しながら、上書作成には留守居組合が大きな役割を果たすものの、各藩の個別の政治動向によって上書の役割が失われていき、翌年の鳥羽伏見の戦後、譜代藩が徳川慶喜助命歎願の上書を作成した時には、留守居組合が機能を失っていく

と主張する。そして鈴木が指摘する「譜代藩による政治的連帯」は、江戸藩邸の留守居役たちによって展開されたものであり、譜代諸藩の総意として展開したものではないと結論付けている。一方で、複数の譜代藩の江戸藩邸間で上書作成が実現したことに、江戸留守居役や江戸藩邸がある程度の独立性を持ち、幕末維新期にも江戸という政治空間が維持され、機能していたと指摘している。

第三章「明治維新期の江戸留守居役と公用人」は、明治維新後の新政府により、留守居役が公用人として再編され、留守居役の機能が維持されるとともに新たな機能が付加されていった様相を分析している。従来公用人と同時に設置された公議人に研究が多く、留守居役との関係も指摘されていたものの、公用人を対象とする研究は少なかった。本章は公用人・公議人の設置や機能を確認するとともに、信濃松代藩真田氏の公用人の日記を検討しながら、公用人が軍務官・会計官などとの対応はじめ、藩主の参内に供奉し、国元との連絡や取次、信濃諸藩の触頭として他藩に朝廷からの布達を下付し、他藩からの歎願などを

取次ぐなどの事例を検討している。ここから公用人が留守居役を継承し、さらに幕藩関係から朝藩関係への転換で新たな機能が付加されていく姿を考察している。

第二部「戊辰戦争をめぐる譜代藩江戸藩邸の動向」は、下総佐倉藩堀田氏・相模小田原藩大久保氏・駿河田中藩本多氏という個別事例の検討である。戊辰戦争をめぐる譜代各藩の動向について、各藩の国元・江戸・京都などにおける政治動向を検討し、目まぐるしい政治状況の変化の中で、江戸留守居役の活動と江戸藩邸の位置づけを中心に論じたものである。

第四章「戊辰戦争期における佐倉藩の動向」は、二度にわたる上書運動の中心となった下総佐倉藩を対象としている。佐倉藩において上書作成には江戸藩邸が関わったが、藩主が江戸に在住していたため江戸で決定された方針や江戸の情報が伝達され、国元との連携が取れていた。なお京都には藩邸がなく、上書提出のため上京していた江戸留守居役が、京都における周旋活動や情報収集に当たったと論じている。

第五章「戊辰戦争における小田原藩江戸藩邸の動向」では、慶応四年江戸に進軍する新政府東征軍が通過した小田原藩を取り上げる。小田原藩大久保氏は、関東の玄関口にあたる箱根関所を管轄し、江戸の西の護り小田原城を居城としていただけでなく、藩主が大政奉還後に甲府城代を勤めたという江戸防衛の要であった。小田原藩は江戸藩邸が二度の上書運動に参加するが積極的ではなく、国元と江戸藩邸との意志が次第に乖離していく。戊辰戦争期には国元でも藩論が対立し、旧幕府軍が領内に侵入し、これに呼応する藩士も出るなど、藩内は混乱し、一度は東征軍への抵抗を試みるが、結局は江戸藩邸から派遣された留守居役の説得で恭順を決定する。しかし、藩主の謹慎と減封は免れなかった。この過程を本章は紹介している。

第六章「戊辰戦争をめぐる田中藩江戸藩邸の動向」は、駿府城の西の護りである田中城を居城とし、藩主が駿府城代を勤めた田中藩の江戸藩邸の動向を取り上げる。江戸藩邸の役割は幕末維新期に大きく変化し、とくに鳥羽伏見戦後から江戸城よりの指令が機能しなくなり、江戸藩邸では徳川擁護の立場を取り

ながらも、独自の判断で藩主の親族や家臣が下総流山の下屋敷に移転する。一方国元では、尾張藩の勤王誘引運動に応じて勤王証書を提出し、駿府城を東征軍に引き渡している。さらに京都へ情報収集に派遣した家臣は、新政府の意向に即した対応を国元に要求する。田中藩は、江戸―駿府―田中―京都に散在した各家臣が別個に独自の行動を取り、藩としての統一した意志が形成されないまま、東征軍の通過を傍観するのである。しかし江戸開城によって東征軍が江戸を支配すると、退避していた家臣も江戸に戻り、江戸藩邸は次第に新政府の布達を伝達するなど機能を回復していく。以上の経緯を本章は叙述している。

終章では、以上の内容を総括し、幕末維新期に留守居役が各江戸藩邸をつなぐ役割を果たし、各藩の意志決定に大きく関わりながらも、各藩の事情により多様な様相が見られたが、維新後には公用人がその機能を果たし、朝藩体制の中で新たな機能も付加されたことを指摘している。さらに課題として、より多くの譜代藩江戸留守居役および江戸藩邸の考察を重ね、研究の幅を広げていくことを掲げている。

論文審査の結果の要旨

本論文は、近世後期から維新期における譜代藩の江戸留守居役の行動と彼らのネットワークについて、特に大政奉還から戊辰戦争期の政治状況の変化に対し、彼らが如何に対応したのかを検討し、藩の意志決定における江戸留守居役と江戸藩邸の位置づけを論じたものである。

江戸留守居役の研究は厚い蓄積があり、その職務内容や機能、彼らのネットワークや幕政・藩政との関係など研究成果が多い。また江戸藩邸についても機能や政治空間、儀礼の様相、考古学の成果を取り込んだ施設や生活空間の解明など、多様な成果がある。しかし幕末維新期には注目すべき研究は少ない。幕末期に参勤交代制度の変化により江戸藩邸の役割が縮小され、幕末政局の中心が京都となり、江戸城の政治的地位が低下すると、この分野の研究は少なくなり、幕末政治に江戸留守居役や江戸藩邸を位置づけた研究は僅かである。

本論文は以上の動向を批判的に捉え、幕末維新期における譜代藩の江戸留守居役と江戸藩邸の動向を詳細に分析し、新たな研究分野の開拓を試みた意欲的

な研究である。

序章で研究史と本論文の構成を論じたのち、第一部「幕末維新期における譜代藩江戸留守居役と江戸藩邸」は、近世後期から維新期における譜代藩江戸留守居役の行動と江戸藩邸の役割、江戸・東京の政治空間について論じている。第一章「近世後期における江戸留守居役の機能と役割」では、武蔵忍藩が幕府の文政改革に対応する姿を検討し、新史料から忍藩江戸留守居役と幕府側の交渉過程を提示している。また天保期の中山道熊谷宿の飯盛女設置願い一件では、忍藩江戸留守居役から幕府道中奉行に願いが出され、老中の裁可を得るまでの過程の新史料を紹介し、当該の問題で知られていなかった幕府の裁可の過程が判明する。また飯盛女設置願いが却下されたのち、江戸留守居役の独断専権の出願として忍藩重臣の責任を回避しようとした事例を紹介しているが、江戸留守居役が幕府への出願に独自の権限を持っていたことを示す重要な指摘である。この論点を深めれば、近世後期の留守居役研究を進展させる可能性がある。

第二章「維新期江戸における譜代藩の「大勢挽回」運動」は、本論文で最も

力点が置かれた章である。大政奉還直後に帝鑑間詰・雁間詰の諸大名が連帯して、朝廷の上京命令を拒否し「大勢挽回」を目指して上書を作成し、鳥羽伏見戦後には同様に徳川慶喜助命歎願の上書を作成する。この上書作成に、下総佐倉藩などの留守居役をはじめ留守居組合や江戸藩邸が大きな役割を果たした。この行動を、鈴木壽子『幕末譜代藩の政治動向』は「譜代藩による政治的連帯」と大きく評価している。これに対し本章ではこの主張を批判し、上書作成には留守居組合が大きな役割を果たすものの、各藩の個別の政治動向によって上書の役割が失われていき、鳥羽伏見戦後に譜代藩が徳川慶喜助命歎願の上書を作成した時には、留守居組合は機能を失っていくと主張する。そして鈴木が主張する「譜代藩による政治的連帯」は、諸藩の江戸留守居役によって江戸で展開されたにすぎず、国元や京都を含めた譜代藩の総意ではないと批判する。当該の問題について先行研究を訂正しており、本論文の成果の一つである。

一方で江戸留守居役たちの行動に、江戸藩邸が一定の独立性を持ち、江戸という政治空間がある程度機能していたことも指摘している。この指摘は次の第

三章につながる論点であり、江戸・東京の政治空間を考えるうえで重要である。

第三章「明治維新期の江戸留守居役と公用人」は、明治維新後に新政府が留守居役を公用人として再編し、留守居役の機能に新たな機能が付加されていった経緯を考察している。本章は信濃松代藩の公用人を中心にその動向を分析し、新政府と松代藩との交渉・連絡や、松代藩が信濃国の触頭として信濃諸藩へ布達を伝達し諸藩からの上申を取次ぐなど、公用人の役割を詳細に分析しており、かかる研究は従来にない新たな分野といえる。

第二部「戊辰戦争をめぐる譜代藩江戸藩邸の動向」は、戊辰戦争期における譜代藩について、個別に国元・江戸・京都における政治動向を検討しながら、江戸留守居役の活動と江戸藩邸の役割を位置づけようとしている。第四章「戊辰戦争期における佐倉藩の動向」は、佐倉藩では藩主が江戸に在府したため、江戸留守居役が上書運動の中心となって独自に活動したが、国元と江戸藩邸の連携は保たれ、江戸藩邸の意向や情報が国元にもたらされた事例を提示している。第五章「戊辰戦争における小田原藩江戸藩邸の動向」は、小田原藩では江

戸藩邸が上書運動には参加するも消極的であり、国元と江戸との連携は取れず、加えて国元では藩論が二分して混乱が生じ、藩内に進出した旧幕軍と東征軍への対応にも苦慮し、藩主の謹慎や減封の処分に至った事例を考察する。第六章「戊辰戦争をめぐる田中藩江戸藩邸の動向」は、戊辰戦争時の田中藩江戸藩邸が、江戸・駿府・田中・京都の情報と東征軍下向の政治動向に翻弄されながらも、江戸が無事開城されると次第に江戸の政治空間が回復し、江戸藩邸の機能も復活していく様相を検討している。

いずれの譜代藩も江戸―国元―京都などにおける政治動向への対応や情報収集の相違などにより、藩の総意や江戸留守居役の行動・江戸藩邸の役割が異なるという経緯を提示している。これらの事例は個別の譜代藩によって異なっており、終章に展望として明記しているように事例の収集を重ねる必要があろう。

以上、本論文は当該の問題につき注目すべき成果を持っている。ことに第一章において江戸留守居役と幕府との交渉を分析し、新史料から幕府内の願書裁可の過程を提示し、第二章においては先行研究を批判して訂正を加え、第三章

では新たな分野の分析を始めている。

他方、本論文には残された課題も多い。第一に、新史料の収集に努めてはいるが、使用した史料の性格を検討していないものが多い。各史料の性格を論じることから検討を始めれば、さらに考察は深まったはずである。第二に、留守居役の行動の背景にあった政治的動向を明確に把握していない。幕末維新期の政治過程は短時間で大きく変化する。また江戸・京・国元において異なり、情報伝達も時間差がある。個々の場面の分析に各地の政治過程を的確に関連づけた検討を加えていれば、なかには考察の結果が異なったであろう事例も見うけられる。第三に、近世・近代移行期を如何に考え、また自身の研究を幕末維新期の研究に如何に位置づけ、従来の研究に如何に寄与するのか、という問題に関する記述がないことである。かつ、全体として叙述が淡々としているため、折角の重要な指摘が明確に主張できていない箇所も多い。

しかし、これらの課題は今後研究を発展させる中で解決すべき点であり、本論文が幕末維新期における譜代藩江戸留守居役と江戸藩邸の研究を進展させ、

従来の研究を批判しながら新たな知見を加えていることは確実である。よって本論文の筆者宮澤歩美は、博士（歴史学）の学位を授与される資格があると認められる。

令和六年二月十五日

主査　國學院大學客員教授　根岸　茂夫　㊞

副査　國學院大學教授　吉岡　孝　㊞

副査　兼任講師・東京大学史料編纂所教授　箱石　大　㊞